

「ネクストワン」という言葉を聞いたことがあるだろうか。かの有名な画家であるピカソが、「あなたの最高傑作は」と聞かれて、「ネクストワン」と答えたという話である。また、チャップリンが、「どの作品が一番すばらしいですか」と聞かれて、「ネクストワン」と答えたという話もある。

教員の方は、「今までで一番うまくいった授業は」と聞かれたら何と答えるだろうか。もう昔の話であるが、福島大学で「教育実習事後指導」の講義を担当した際に、「今まで2000時間以上の授業をやってきましたが、うまくいったという思う授業は、たったの2時間です」という話をしたことがあった。愚かであった。こう言えばよかった。「今までで一番うまくいった授業は、ネクストワンです」

教員は教壇を去る最後の授業までずっと「ネクストワン」を目指さなければならない。若い頃はうまくいったと思い込んでいた2時間の授業も、今考えるとあやしいものである。うまくいった気になっていただけかもしれない。思い上がっていた。調子に乗っていたのかもしれない。若気の至りだったように思う。

よく「授業をつくる」と言う。私が行った経験を3つ紹介する。1つめは、県教育センターでの話である。私のところに、小学校国語の長期研究員がやってきた。本人に特段「〇〇を研究したい」というものはなかった。時の小学校国語界は「単元を貫く言語活動」というキーワードが広がり始めていたときだった。

それではということで、福島県における先進的な取り組みをしていこうという考えのもと、そのときに求められていた授業を実践することにした。

とはいっても、本人もやったことがないのでイメージがわからない。もちろん学習指導案もできていない。教員研修チーム2の部屋の後ろのソファに座り、約2時間二人でやりとりをしながら、徐々に前期実践の授業像をつくり上げていった。前期実践によって研究の方向性が決まってしまう。本人は辛かったかもしれないが、私は楽しかった。このとき「授業をつくる」という醍醐味を味わうことができた。

この2時間のやりとりがよかったと感じた私は、小学校経験者研修ⅠやⅡの国語講座の際に、研修者の前で、二人で2時間のやりとりを再現したことがあった。また、本人の授業実践の指導案を、「モデル学習指導案」として研修者に配付した。長期研究員の研究をなるべく講座にも反映させ、研究成果を最新、最良の情報として広めることにしたのである。

2つめは、再び県教育センターに勤務することになる前に、福島から奥会津、約150km離れた金山町立横田小学校に2年間勤務していたときの話である。同じ金山町にある金山中学校の国語の先生が、以前センター研修にいらしたことがある方であった。4月に赴任して早々である。その先生から電話がきた。とても明るい声で「今度授業の相談にお邪魔してもよろしいでしょうか」「ああ、いいよ、いいよ。これも出会いだから。偶然とは思えないしね」

その先生は、明るい笑顔でやってきた。そして、国語の授業のことを話し始めると、「金山中学校の生徒をこうしたい」「自分の授業を変えたい」という思いと、何となくの単元構想があるだけだった。学習指導案などはない。指導案がないことが重要なのである。指導案があると、それに縛られ、大幅な変更がしにくくなる。本当は、その指導案をボツにしたくても、さすがの私とはいえ、なかなかそうは言えないものである。

(次号に続く)